



TITLE:

倉敷通信 : たより

AUTHOR(S):

岡林, 滋樹

CITATION:

岡林, 滋樹. 倉敷通信 : たより. 天界 1939, 19(218): 226-249

ISSUE DATE:

1939-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167819>

RIGHT:

倉敷通信

た　よ　り

四月23日は奇妙な日であつた。實に十何日振りに天氣になつて、午前には麗かな晴天であつたが12時頃から天候が急變して足早な黒雲が空に亂れ始めて、強い風が吹きおまけに雨さへ加はつた。そして時折り物凄いい雷鳴があつた。

雷鳴の嫌いな自分は小さくなつて宿舍の窓から外を眺めてみると風は益々猛烈を極めてやがて前の農研の柳の枝が折れて飛び始めさへした。雨もそれに比例して激しくなつて行つた。どうなる事か知らんと思つてみると途端に耳を聳く大音響、見ると観測室の屋根が吹き飛ばされてゐるのである。

幸ひ望遠鏡は無事であつたが何しろ屋根が飛んで仕舞つたのであるから雨のかゝらぬ様に蓆をかぶせて縄でくくつた。

其の夜暴風雨の名残りの雲があつたが遅くなるにつれて晴れさうなので、月の沈むのを待つて變光星の觀測をやらうと思つた。月は23時頃沈むのでその間新星でも探さうと思つて双眼鏡をもつて外に出た。

20時少し過ぎて先づ双眼鏡は馭者座の銀河附近に向けられ、それからずつと西北の方に移つてペルセウス座に來た時にびたりと止まつた。r 星の北約10分の所に見慣れぬ星を見出だしたからである。

直様 Norton 星圖と古賀恒星圖が調べられ大體の位置も出された。新星だと思つたから前後4回の光度が30分間の中に觀測された。そしてひよつと色を見ようと思つた。先年神戸の總會の席上で新星發見の狀況を話した折、木邊さんが“その新星は赤い色でしたか”ときかれたのを思ひ出したからである。8センチ(×40)の屈折望遠鏡をそれに向けた時私は彗星狀の物を見出した。とその途端に該星は黒雲に包まれて再び出現しなかつた。

兎に角電報だけは打つて置かうと山本先生のお宅へだけ「シンセイラシキモノ(スイセイ) ペルセイニユノソバ 五トオ オカハヤシ」と云ふ甚だ妙なそして位置も何も書かない非科學的な報告をしたわけである。今迄新星だと思つたのが瞬間彗星に見えたので少時呆然としてこんな妙な電文を書かしたものである。〔第226頁へ続く〕

しかしながら、此の“新時刻”なるものは、政權とか、國際關係とかを離れても、立派に天文學應用的理論から主張すべき筋あひのものであつて、かつて自分が滿洲國や臺灣の人々のために提唱した所であり、又、近年、支那大陸の人々のために主張してゐる所である。要は、この“新時刻制”なるものが、單なる利便の問題よりも、むしろ、經濟上の利害關係から先づ論ぜられるべきものであり、尙ほ其れの序でに、人々の保健上、又風紀上からも考へらるべき問題なのである。之れを例へば、かの歐米諸國に於いて、今尙ほ“夏期時刻制”が多く實行せられる所以も、又、自分が昨年來わが日本内地のためにも、時刻を一時間だけ進めて、東經150°の標準時を新しく實施するやう建議しつゝある所以も、皆、同じ理論に基づくのである。従つて、強いて言へば、こうした時刻制改正の主張に正面から反對する者は、只、電燈會社だけである筈である。(あたかも、禁酒運動に對する者は酒造業者であるといふ類である。)こうした主張が決して空言でないことを證據立てるためには、既に兩三年此の新時刻制を採用してゐる滿洲國や臺灣で、嚴密な經濟統計をとつて見れば好い。

〔第237頁へ続く〕

★ ★ ★ ★

〔第249頁より續く〕

翌24日は幸ひ上天氣で日の暮れるのを待ちかねて8センチをその邊へ向けた。γ星の傍にない。“はゝあ彗星だな”と思ひつゝ5分の後に昨日の位置より東へ3度ばかり移行した該星を見つけ、星の位置、尾の有無、核の大きさ等を見積ると、直様4,5丁先の郵便局へ、ほとんど轉ぶ様にして駈けつけて、山本先生と東京天文臺へ電報したのであつた。

其の後判明した所に依りますと外國では大部以前に發見されて居つた由、數時間の差とか1日の異いとか云ふのでしたら心残りもありますが、もう1週間も前に發見されて居たのですから私もあきらめられますし、又それが今後への鞭撻ともなれば幸甚と存じてをります。

前に書きました様に肝心の望遠鏡が筵をかぶつて居りましたので見事な彗星の寫眞が撮れなかつたのが残念でした。會員諸兄の中に該彗星の寫眞をお撮りになつて居ましたらどうか倉敷天文臺へ一葉御寄贈下さらん事をお願い致します。(岡林滋樹)